

今純三・生誕130年展と『青森県画譜』¹⁾

太田原慶子²⁾・對馬恵美子³⁾・板倉容子⁴⁾

Documentation of “Aomoriken Gafu” : Experimental Art of Junzo Kon
OTAHARA Keiko, TSUSHIMA Emiko, ITAKURA Yoko

キーワード；今和次郎、棟方志功、銅版画、石版画、考現学、東奥日報社

はじめに

青森県弘前市出身の今純三（1893～1944年）は、本県の洋画や版画、美術教育の礎を築いた日本の近代銅版画を代表する先駆者の一人である。純三没後、家族によって長く守られてきた作品及び銅版画原画等は、昭和42（1967）年に青森県立図書館（以下、図書館）に寄贈され、43年3月には「今純三画業展」が開催された⁽⁵⁾。そして、これらの作品資料は現在、青森県立郷土館（以下、郷土館）所蔵となっている（1997年移管）。

郷土館では、純三の業績について、平成4（1992）年の特別展「日本近代銅版画と今純三」等の展覧会開催をはじめ、作品資料の収集、調査研究を進め、その成果を公開してきた⁽⁶⁾。生誕130年にあたる令和5（2023）年、代表作である『青森県画譜』、『創作版画小品集』（『エッチング小品集』）といった青森での仕事に焦点をあてた記念展を企画し、青森県立美術館（以下、美術館）の協力を得て、サテライト展「生誕130年 今純三—純三が描いた戦前の青森—」（以下、「生誕130年展」）を開催した⁽⁷⁾。昭和初期の青森の風景や人々のくらしを題材にした『青森県画譜』は、当時最も先進的で高度な版画技法を駆使して制作された優れた版画作品であり、高い芸術性を持つ。また、鋭い観察眼と優れた描写力による写実的表現は、歴史及び民俗資料としても貴重な記録である。

本稿では、「生誕130年展」の概要を紹介するとともに、本展の中心に据えた『青森県画譜』の関係資料を改めて整理し、制作動機等について考察を加え、「今純三」研究及び近代版画史研究の一助としたい。

1. 「生誕130年・今純三」展

〔純三の生涯とその仕事〕

『青森県画譜』（以下、『画譜』）は、昭和8（1933）年10月から毎月一輯ずつ、翌年9月の第十二輯まで、東奥日報社から発行された版画集である。銅版や石版によって制作された原画（原図）をもとに、最終的に石版で大量に制作された。全100葉の版画を毎月8～10葉に分割し、純三自身が執筆した各画の解説文2葉を加えて、県内外の予約者に配られたものである。1000部の予約があったといい、予約者には特典として保管用の桐箱が贈呈された。また、全国の主要図書館に布張りの表紙を持つ冊子に装丁された形式のものが寄贈された（『東奥日報と昭和時代・前編』東奥日報社、1979年、104頁）。

本展導入部では、100葉全ての拡大画像を映写し、『画譜』形態として、各輯毎の封筒、保管用桐箱が揃う状態と、合本装丁された冊子形式があることを紹介した（冊子には、1972年東奥日報社から復刻刊行されたものもある⁽⁸⁾）。また、『画譜』とともに東奥日報社が発行した「最新青森県地図」（以下、「地図」、郷土館蔵）を本展で初めて公開した。四色刷りで、青森、弘前、八戸の三市の市街図が付く「地図」で同紙月極読者に無料で配られた（前掲『東奥日報と昭和時代・前編』）。原図制作者は純三である。同時期に手がけられたこの「地図」と『画譜』の関係についての比較分析は、今後の検討課題の一つである⁽⁹⁾。



会場風景（『画譜』の拡大映写風景）



『画譜』展示状況：奥・桐箱入り 手前・「最新青森県地図」と冊子形式のもの

1) 原題『青森縣畫譜』、本稿では『青森県画譜』と表記する。 2) 青森県立郷土館 学芸主幹（青森市本町2丁目8-14） 3) 青森県立郷土館 ゲストキュレーター（同） 4) 青森県立美術館 学芸員（青森市大字安田字近野185）

〔純三の生涯とその仕事—油彩画から版画へ〕

純三の父は、弘前市で医師をしていた今成男（1859～1911年）、兄の今和次郎（1888～1973年）は、建築・服飾・民俗学等幅広い分野で活躍した研究者である。和次郎は、人々の暮らしや街並みについて詳しく調査分析し、図表やイラストで記録し社会全体の変化を考えると「考現学」⁽¹⁰⁾を提唱した（家族構成については、『今純三と考現学展』参考図録『今純三 絵草紙』2011年、5頁）。

一家は、純三が弘前市内の高等小学校を卒業後に上京した。純三は、当初医学を学ぶが、家族の反対を押し切り、画家になることを決意し、本郷洋画研究所に入り油彩画を学んだ。そして、第7回文展（文部省美術展覧会・1913年）、第1回帝展（帝国美術院展覧会・1919年）で入選を果たす。帝展入選作の「バラライカ」（油彩・弘前市立博物館蔵）は、画家を志す青森の若者達に強い印象を与えた。棟方志功は深い感銘を受け、後に「バラライカの女の柵」（木版・棟方志功記念館蔵・1962年、展示作品は1972年摺）を制作している⁽¹¹⁾。帝展作家として東京で華々しくスタートを切った純三だったが、関東大震災（1923年）後、兄和次郎の強い勧めで東京を離れ、青森市に移り住んだ。移住してまもない彼が描いた肖像画を見ると、東京で培われた油彩画家としての確かな技量が見て取れる⁽¹²⁾。やがて、文芸誌の表紙画等を描いたり、印刷の仕事をしたりしながら銅版画や石版画の研究を始めた。そして、兄和次郎から依頼された県内の「考現学」調査を行ううちにその魅力へと引き込まれていった。版画技法の研究と考現学的手法である写実的検証をもとに生まれたのが『画譜』であり、『小品集』であった。

エッチング（銅版画）による創作版画集『小品集』は、三枚一組で封筒に入り、絵葉書として使用できる形式で、『画譜』刊行後の昭和10（1935）年から同14（1939）年までの間に36集分制作されている。本展では、郷土館所蔵の『小品集』全てを紹介することができたが、最終的に何集まで制作されたのか、全体像は現在も明らかになっていない。青森から上京した昭和14（1939）年以後も、その制作が継続されていることは確認されている（前掲『今純三 絵草紙』2011年、38-39頁）。

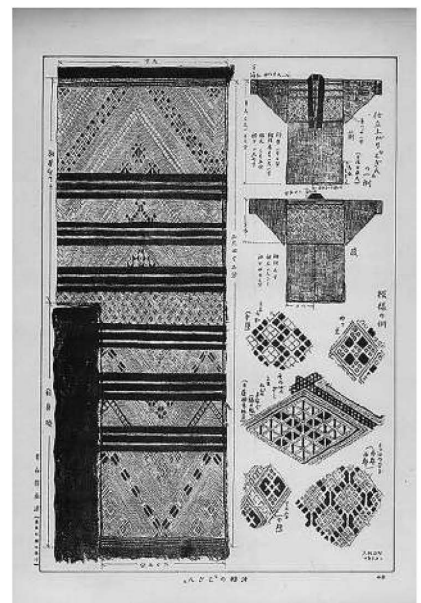
青森市米町（現・本町）にあった今泉書店を通じて、『画譜』の普及版として販売された『小品集』の当初の売れ行きは芳しくなかったという（『青森県印刷史』青森県印刷工業組合、1982年、37頁）。『小品集』には、純三ならではの視点で描かれた日常の風景が葉書（タテ14cm、ヨコ9cm）の画面の中におさめられており、かつてそこにあった光景や出来事について、小さな発見や気づきをもたらす。観察眼の鋭さと細部にまで気を抜かない誠実で写実的描写の確かさがあり、さらに銅版画そのものの描線と質感が画面に深みを与え、見る者の視線や意識を奥深く引き込む力がある⁽¹³⁾。

〔純三が描いた戦前の青森—青森県画譜の世界〕

ここでは、描かれている県内各地の風景や年中行事、暮らしの中にあつた様々な道具やモノについて、実物資料を用いながら、『画譜』が歴史及び民俗的に貴重な記録資料であることを提示した。「郷土工芸図・津軽のこぎん」（第五輯、下図）に、純三は次のような解説文を書いている。

一こぎんは又「^{ぬの}布こぎん」「^{さし}刺こぎん」といはれ元來は^{コギヌ}小衣の意で衣服の一種の名稱であらうといはれる。胸から肩背と、衣服で最も擦り切れ易いところを豫め糸で刺して置くのは賢明な方法であつた、それが装飾として美しい文様を刺し出すことに發達して行つたのであらう、然し丈夫だといふことゝ濫といふ實用上のことは、少しも失はれて居ないのはいふまでもないことである。そして昔は農家で皆麻を植ゑ、又紡いだもので、同時に又カラムシといはれる野生の麻をも紡いだ。それを布に織つて本藍に染め上げ、三尺内外のもの二枚が一對となつて、こぎん刺しの地布とされる。刺し方は忠實に布目を拾つて直線模様を表すので、白の模様が濃藍の地にくっきりと浮かび出して、誠にさっぱりとした美しさがある。惜しいことに此の美しい郷土的な工藝も、今から三四十年位前までは盛んに行はれたが現在では恐らくこれをさして居る女は、居なからうとの話である。—
本図の三本の縞模様があるこぎん（三縞こぎん）について、その記録の重要性が指摘されている（「そらとぶこぎん」第4号 津軽書房、2020年、6-7頁）。本展では、本図を参考に復刻制作されたこぎん（ギャラリー森山蔵）と実際に人々が着用してきたこぎんを紹介し、生活の中で生まれた技術とその継承について、『画譜』の持つ考現学的性格、記録的価値を考えた。

「郷土玩具図」（第五輯）では、調査の結果、郷土館所蔵資料中に描かれている玩具があることが判明した。そのきっかけとなつたのは、純三の娘・小倉ミキの著書『父・今純三のこと』（北の街社、1979年）の一節である。純三は、『画譜』を描くのに、「土俗の人形や、こぎんなどをあつめ、アトリエのそこかしこにかざつて描いた」（35-37頁）という。玩具類は、弘前市出身の郷土玩具収集家で民俗音楽研究家の木村弦三（1905～1978年）から借りていたのでと推察していたため、改めて木村弦三旧蔵資料と照合したところ、下川原人形（「忠臣蔵（三つ揃い）」とあるうちの一体、右図）とこけし（えんつこ）を確認できた。長い時間を経た実物とスケッチ記録、これら結びつけることができたのは本展調査の成果の一つとなつた。



「郷土工芸図・津軽のこぎん」『青森県画譜』第五輯

2. 『青森県画譜』の「作者の言葉」にみる刊行のねらいとは

ここでは、『青森県画譜』（以下、『画譜』）の「作者の言葉」からその刊行のねらいについて、関係資料を改めて整理し若干の考察を加えたい。『画譜』一覧は、文末に凡例と共に付した(62-64頁)。

先にも述べたが、『画譜』は昭和9(1934)年9月20日に第十二輯を発行して完結した。この十二輯には、それまでのように、画10葉(第一輯～第十輯までは8葉)と純三による解説2葉に加えて、東奥日報社長山田金次郎による「青森県画譜終刊に当りて」1葉、100葉の各画作品名を発行順に記した「青森県画譜内容目次」1葉、描かれた風景、建築物等をその各所在地毎に分類した「青森県画譜郡市別内容目次」1葉、純三による「作者の言葉」一葉の計4葉が付加された。「作者の言葉」では、純三が『画譜』を発刊することになった五つの著作計画の動機が半分を占める。動機は以下の(一)から(五)(現文のまま)で、これらについて考えてみたい

(一)郷土の自然と人に就いて其の真相を描写して一つの纏まった畫譜としたならば何等か世を、人を、益するものがあるのでは無からうかという考からその実現を企てたのであった。

(二)青森師範学校に圖書の教師として在職中、餘暇に、郷土の風俗に就いて採集をし、私の兄和次郎の編纂になる『民族藝術造型美術号』や『モデルノロヂオ』『考現学採集』等のために、種種の寫生圖を送っては居たがそれらは断片的なものであった。

(三)又竹内俊吉氏が東奥日報紙上に発表した我が郷土を舞台としてものされた連載小説「海峡」の挿繪を擔當した際には、出来るだけ郷土の風物の特質を表はそうと努めたのであったが思ふ十分には行かなかった。

(四)學校では郷土教育に關して職員會議が開かれる様なことが時々あったが、そういふ場合に、自分には何かしら社會的に課せられた責務があるという暗示を受けることが多かった。

(五)又一つには自分の手元に凹版と平版印刷の製版に事歎かぬだけの器械の設備がある上に、平版印刷製版の方式の一部分に就いて、たいしたことはないが或特殊な方法を案出することが出来て居た。

・(一)と(四)について

純三の版画の代表作には『画譜』をはじめ『奥入瀬溪流』『小品集』の連作があり、これらの作品には多くの風景画が含まれているが、彼ははじめから風景画を好んで描いていたわけではない。昭和4(1929)年7月19日付東奥日報紙には「私は風景の方でない、だからこれぞというスケッチ旅行もしたことがない。」と風景画を描くことにほとんど触手はたたらかない気持ちを吐露している。だが、その後「本県には他に比を見ないくらい多くの天然の至宝が蔵されている。また、四季の変化にも富んでおり、まことに詩趣が横溢しているといつてよかろう。今、文学上の『詩』ということにはかわりなく自然という言葉も、ごく広い意味に考えて、要するに郷土の『趣(おもむき)』をば別になんということなしに汲み上げて味わってみたいと思うのである。」(前掲、小倉ミキ『父・今純三のこと』211頁)といい、大きな気持ちの変化がおこっているのである。この変化は、考現学的手法による絵画表現を習得した他に、青森県師範学校在職中に当時国内各地で興った郷土教育の高まりに純三も共感するものがあり、彼の絵画(版画)のモチーフの変化を促し、『画譜』発行の動機のひとつとして加わったのではないだろうか。

・(二)について

文中の「郷土の風俗に就いて採集をし」、「種々の寫生圖を送って」とは和次郎が純三に依頼した青森県内の考現学調査のことである。考現学採集を依頼した和次郎は、純三が「青森に住むようになってから、青森の風俗の採集圖を注文して作ってもらったが、それらを東京の展覧会や雑誌の上に発表するたびに、絵図の精緻さ、つかまえどころの特異さで展観した人々を驚かしたのだった。」と、純三の考現学採集の絵図を賞賛している。和次郎の言う「東京の展覧会」とは昭和2(1927)年10月15日から21日に東京新宿にある紀伊国屋書店の二階で開催した「しらべもの[考現学]展覧会」のこと、『民俗(原本は民俗と表記)芸術造型美術号』とは、第1巻第11号・1928年民俗芸術の會地平社書房発行、『モデルノロヂオ』は、1930年春陽堂発行、『考現学採集』は、1931年建設社発行のことである。

『画譜』の刊行を他の誰よりも喜んだのは、和次郎であった。純三に対してほとんど褒めることのない和次郎であるが「各地方にこんな画家(?)がいて、各地の物象の報告をしてくれたらば、それらの集積は自ら日本国民全体の生活様態の報告となってくれるのに、今では青森の今純三以外にはそれだけの報告絵図の描ける者がいない。一こう言っても誇張でも自負でもあるまい。それで今度まとまった図譜を出すというのを聞いて、これこそ純三にとっての一生一代の最も適当したしごとであると歎(よろこ)んでしまった。」(昭和8年9月17日付東奥日報紙、「純三と今度の仕事—青森県画譜について—早稲田大学教授 今和次郎)と手放して褒めちぎっているのである。

『画譜』の100葉のうち考現学的手法によるのは19葉あるが、その他に建築学を学んでいる純三ならではの表現方法として鳥瞰図がある。他にパノラマ的視点、仰ぎ見る視点などまるで純三の眼がドローンのカメラ(あるいはドラえもんのタケコプター)のように空中を自在に動き回っているような楽しさが、今も『画譜』の人気の高い要因のひとつではないだろうか。「種々の寫生圖を送っては居たがそれらは断片的なものであった」とは純三が和次郎に送付したのは、自宅アトリエのある青森市に関する考現学採集圖がほとんどであることから、『画譜』では採集範圍を青森県内全域に広めたいということもとれるが、考現学採集を『画譜』にも入れ込んでいることを遠回しに言いたかったのが本音かもしれない。



「下川原人形」木村弦三旧蔵(郷土館蔵)

・(三) について

東奥日報紙に竹内俊吉による小説『海峡』が連載される直前の昭和7(1932)年6月11日同紙面に「次回小説予告」として作者の竹内と挿絵担当の純三のそれぞれの言葉が述べられている。そこで、竹内は『海峡』の目的を「比較的普遍妥当性のある思想と生活をしている平凡な一家の生活断面とこれを囲む人々の生活をくり展げて、そこに必然に湧き起こる苦しみや喜びや社会的圧迫や経済的苦悶やを叙して見たいと思う。」とある。純三の描いた挿絵は全部で163点ありその三分の二以上は、竹内が人々の生活を叙したいと言うように、人物や建物内の描写が占めている。一方の純三の挿絵画家としての「言葉」を見ると、「音楽でいへば伴奏というような性質を挿絵は多分に持つて居るようです」とあり、あくまで挿絵担当の領分を逸しないようにつとめていたと思われる。さらに新聞紙面の挿絵は小さな面積であり、当時の新聞の印刷では細部の表現が潰れてしまう事も多い。これら諸々は印刷術(版画)を研究し、版画の芸術性を求めていた純三には、満足できなかったのではないだろうか。

・(五) について

昭和8(1933)年9月10日(同紙)に初めて『画譜』の予約募集の広告が掲載されたのと同じ日時の「サンデー東奥」に純三による「青森県画譜は私の多年の念願 画譜の一枚一枚は私の作品そのもの」という記事が載った。それによれば『青森県画譜』を作りたいということ、私の多年の念願であって「古いことを申すようではありますが、十年前に東奥日報紙上で創作版画の歴史や其価値其将来などを論じたことがあった」ともあり、画譜の構想のきっかけは10年前まで遡ることができることになる。

10年前の大正13(1923)年4月5日(同紙)に「民衆的芸術としての版画(下)」では、創作版画の歴史として「化学的の知識と画室と器械などの十分な設備と、印刷職工的の汚い作業を厭はない心等を必要とする困難があるために、日本では今のところ未だ指を屈する程しかエッチェアとして存在しない。」とあるように、当時はまだ銅版画に取り組む画家たちは少数しかいなかった。その理由としては前述の文にあるように、版を腐蝕して凹ませるための薬品を扱うための専門的知識や、凹ませたインクを紙に写し取るための強い圧力をかける専用のプレス機等が必須であり、それらについての技法書、プレス機などの道具類は日本では入手困難であったからである。純三は同じく銅版画に関心があった西田武雄(1894～1961年、三重県生まれ。1918年本郷洋画研究所に入り、在籍していた純三と出会う。1932年『エッチング』誌発行、エッチングの普及に努めた。)が外国の技法書を苦心して訳したものを、自分用に写し取り、青森のアトリエで一人試行錯誤を繰り返しながら銅版画の研究を続けた。銅、平版画の研究は肉体的、精神的、物理的にも想像を絶するような困難がともなったが、それは「民衆的芸術としての版画」を強く希望する純三には超えなければいけない手段であったろう。「民衆的芸術としての版画(下)」は、次の文章で締め括られている。「私は民衆によき芸術を捧げたい心から油絵の製作といっしょに今しきりにエッチングの製作に熱中しているが日ならず私のそれが廣く家庭の居間、客間の壁間を飾るという喜びに私は満ちている。」

「作者の言葉」にある五つの画譜刊行のねらいのうち、この(五)で述べる動機こそがもっとも重きをもつものではないだろうか。ここでいう「平版印刷製版の方法の一部分に就いて、たいしたことではないが」案出できていた「或特殊な方法」とはどのようなものか、技法の工夫や制作の工程に関わる郷土館資料の一部を紹介したい。

・『画譜』銅版画の原版

銅版画で制作された原画(原図)のうち、郷土館が所蔵する『画譜』関係銅版原版により確認できるのは、以下のものである。「善知鳥神社境内鳥瞰図」・「最勝院五重塔」・「案山子百態図」(第一輯)、「猿賀神社境内」(第二輯)、「風俗図 乞食の風態」(第八輯)これらの原画技法は、解説文に純三が記載した通り銅版画ということになるが、「最勝院五重塔」はコロム石版(多色石版)とある。したがって、原画作成までに銅版画と多色石版という二通りの技法を用いていることになる。つまり、銅版画による原画から単純に石版原版を作成しただけではなく、版画としての各技法の特性をより活かし、美術的な作品を作りあげることにより工夫を凝らしていたことを窺わせる。

・「善知鳥神社境内鳥瞰図」について(銅版画の組み合わせと再版に向けての加筆)

第一輯第一図「善知鳥神社境内鳥瞰図」については、銅版原版と石版刷の完成版までのいくつかの工程と考えられるものがあるので、見てみたい。まず、銅版原版と石版刷による完成図を細かく比較、分析したところ、原版では空き地だった部分に完成図では新たな建物が描かれていることに気づいた。『画譜』刊行開始を伝える「サンデー東奥」(昭和8年9月10日付)では、原版を刷った画(61頁図1)が大きく取り上げられている。

では、新たな建物がどの段階で描き加えられたのか。本図には、次のような面白いものがある。「見本」という文字が画面右上にある石版刷のものだ(61頁図2)。これには、銅版原版で空き地だった部分(画面右下部分)に、新たな建物が鉛筆とペンで直接修正を加えた箇所が認められた。完成図として配付された「善知鳥神社境内鳥瞰図」では、該当部分もエッチング描線で全体図の中に収まっているのである。銅版原版から石版刷完成図までの間になんらかの方法で新たな建物が加筆されたと考え、関連する原版全てを見直したところ、加筆された建物の銅版原版が見つかった(61頁図3)。したがって、2枚の銅版画を組み併せて石版刷の原画が作成されたと考えられる。さらに、この銅版原版には、もう一つ、興味深い点がある。『画譜』刊行後も、水路の水流や池、沼の波紋、木々など加筆が施されていて、純三が「もしまた他日に機会を見出し得たならば増補訂正して完璧を期したい所存である」(「作者の言葉」)で言った通り、さらなる表現の充実を図っていたことも分かるのである⁽¹⁴⁾。

・『画譜』石版刷の試刷

今回の調査では、通常の『画譜』の紙質と異なる薄い半紙状の紙に刷られたものも確認した。「黒石町御幸公園」(第三輯、原画は銅版、紙全体大きさ26.0×35.5cm)、「雪中行軍遭難者墓地全景」(第五輯、原画は多色石版、27.0×39.5cm)、「青森市新町通夜景」(同、原画は

多色石版、27.0×41.0 cm、61 頁図4)、「農村民家図(南部地方)」(第七輯、原画は石版、27.5×41 cm)他全部で17点ある。多色刷のものに関しては、版面(画部分)下に刷る際に紙を版に対して正確な位置に置くためのT印(十印見当・トンボ)がある。

当時の印刷技術に詳しい三上伸氏⁽¹⁵⁾によると、紙質、刷りの状態、さらに、色版を合わせるための印(トンボ)があることから、最終段階における石版刷りの試作(試刷)のもの可能性が高いとのことであった。通常であれば、刷り具合を確認した後は、廃棄されるものであるが、今回のようにある程度まとまった数で残されたのは、非常に珍しいことであり、試刷段階のものにもその価値を認められるほど、制作に関わった人々の間で『画譜』の評価が高かったという側面を示すものといえるのではなかろうか。

三上氏によると、銅版画(エッチング)原版から石版刷の原画を制作する工程については、いくつかの方法があり、純三の『画譜』制作当時は、それぞれの印刷会社(職人)の腕の見せ所であったという。石版印刷機で銅版原版を刷ることは可能であるため、まず原版を用いて転写紙(コロソーパー、チャイナペーパー)に刷り、それを石版に転写して石版原版を作成する。一枚の銅版画原版から転写紙を介して複数の石版原版を作成し、大型の石版プレス機であれば、版台の大きさに併せて複数の版面を置くことができるため、一度のプレスで複数枚を刷ることができたという。この複数の版面を置いたという段階を示す試刷りがある(61 頁図5)。紙質は、完成版と同じだが、異なる原画を配置し刷られており、複数の版面による制作の実態を具体的にみるることができるものである。

こうした手法を駆使すれば、前述した「善知鳥神社境内鳥瞰図」のように、銅版画による原図を組み合わせて石版刷りのための原画を作成することができ、組み合わせたことで生じる描線の微妙な違和感を極力抑えつつ石版刷りへ移行させることが可能であったろうと推測できる。いずれにしても、当時の印刷技術としてかなり先進的な方法であり、高度なテクニックであることは間違いないのである。『画譜』一枚一枚が版画による「複製品」ではなく、「私の作品そのものである」(「青森県画譜は私の多年の念願」、前掲「サンデー東奥」という純三の思い、版画だからこそ表現できる作品、より良いものを作り上げようという情熱を感じるができる。

終わりに～純三にとっての青森

芸術の社会的な役割を追い求め、その才能と努力で培った技術を最大限に発揮して『画譜』や『小品集』という仕事に取り組んだ青森での歳月を、純三自身はどう思っていたのだろうか。

昭和14(1939)年、彼は家族を連れて再び上京した。上京してまもない9月20日夜、東奥日報社が主催する「在京芸術家座談会」に出席し、彼は次のような挨拶をした(『月刊東奥』1939年、115-137頁)。

一私は今純三と申します。弘前市出身です、先に東京で十五、六年、青森市に帰りまして十五、六年、それから今月十日又東京へ出て参りました。今後東京に永住する積もりですからどうぞよろしく。東奥日報社とは非常に縁故が深いのでありまして毎月月刊東奥の表紙絵を描いて居ります。一号、二号は私ではありませんが、三号から私が描いて居ります。今月も描くのですが遅れて非常にご迷惑をかけて居りますが、今日はどうしても描かなければなりませんのでそれを仕上げるために少し遅刻しました。この度の上京は丁度浦島太郎が龍宮から帰って来た時のようなのですが、浦島太郎とは反対に昔の東京へ出て来て非常になつかしく思っています。どうぞ今後ともよろしく。一

この時、彼は青森で過ごした年月を「龍宮」と言った。青森での生活は、龍宮のように穏やかで居心地の良いものであったのか。真摯に版画研究と作品制作に打ち込む日々、そして、『画譜』という厳しいながらも大きな仕事に取り組むことができた日々から、ついに「現実」の東京に戻ってきた。彼はその後、銅版画の普及のために様々な「現実」の仕事を引き受けつつ、これまで研究を続けてきた版画技法についてまとめた『版画の新技法』(三国書房、1943年)を出版するも、心身の酷使により病に倒れ、昭和19(1944)年に世を去るのである。

「生誕130年 今純三展—純三が描いた戦前の青森—」展の開催及び本稿執筆に際し、以下の機関、関係者の皆様にご協力いただきました。ここに記して改めて深く感謝申し上げます(順不同)。

弘前市立博物館、財団法人棟方志功記念館、ギャラリー森山、青森県立美術館、森山豊氏、三上伸氏、鹿内史氏

註

(5) 会期は、昭和43(1968)年3月1日から11日。会場は、青森県立図書館。この画業展に、青森市出身の世界的版画家棟方志功(1903～1975年)が寄せた献辞(草稿)「今純三画伯に捧ぐ」がある(次頁)。純三への敬意と、家族及び関係者に守られてきた貴重な作品資料が、今後も未来永劫、保存されていくことを強く願う棟方の思いが伝わるもので、純三の仕事が多くの若い芸術家たちに与えた影響の大きさが分かる。内容は以下の通りである。

一至極清韻、絶妙の描法と、その版法は、よく我が国、銅版画の発祖を成就、あまねく、ほしいままにその版意義を、圧業してゐます。わが、青森県は、その発祖今純三画伯を芸執とその命魂を主流にして、今や、世界世上に版画の冠絶を中外に熟知され得る次第こそ、正にも「美こそ永遠」への生きつづけ行く姿魂であると存じます。ここに、今純三画伯のおおむねの作品の公なる保存がなり、その組織に依る最初の展覧会が開催される大意を讃嘆して止まないものであります。花深処無行跡 棟方志功 一

(6) 展覧会関係は、平成14(2002)年特別展「今純三・今和次郎展—二人が描いた大正・昭和のくらしと風景」、平成23(2011)年企画展「今純三と考現学展」(参考図録『今純三 絵草紙』)。調査研究報告関係には、次のものがある。對馬恵美子「青森県立図書館所蔵今純三作品」技法別目録(1)「青森県立郷土館調査研究年報」18号、「青森県立図書館所蔵今純三作品」技法別目録(2)「同」19号、「今純三『緑のアトリエ』考」同・20号、「今純三の風景画考—今純三作品に見る青森県の戦前の風景」同・21号、「今純三『エッチング奥入瀬

『漂流連作』考」同・22号、戸村茂樹・對馬恵美子「今純三銅版画原版の修復についての報告」同・24号、青森県立郷土館美術調査報告書（1）『今純三作品目録』

(7) 会期は、令和5(2023)年9月30日(土)から同6(2024)年1月28日(日)。会場は青森県立美術館（青森市大字安田字近野185）、「コレクション展2023-3」内で開催（美術館共催）。

(8) 1934年版（9月刊行終了後12月装幀）と1972年復刻版では、頁構成が異なるようである。34年版では「作者の言葉」、72年復刻版では東奥日報社社長山田金次郎「青森県画譜終刊に当たりて」が巻頭に置かれる。また、72年版は、十二輯全ての解説文がまとめられ、毎月県内各地偏りなく、解説文も含めてその都度制作するという当初の発行の意図やそれに伴う膨大な作業量を推し量ることは難しい。

(9) 「今純三氏力作 青森県画譜刊行趣旨」（昭和8年9月10日付東奥日報紙）によると、東奥日報社としては、「一（地図）」は平面的に青森県を述べ、一（『画譜』）は立体的に青森を叙して、もってわが郷土の全貌を完全に表現したいと図った」という。

『画譜』と『最新青森県地図』刊行における東奥日報社のねらいについては、中園美穂氏が言及している（『近代青森県を描いた吉田初三郎と今純三—二人が描きたかったものは何か—』弘前大学国史研究155、2023年、29頁）。

(10) 考現学とは「1923（大正12）の関東大震災後、装飾家仲間や和次郎が教授をつとめる大学の教え子達と共に都市風俗の変化を街頭で観察し、多彩なスケッチを用いて記録・分析した調査研究のことである。」（黒石いづみ「考現学とは何か」青森県立郷土館特別展図録『今純三・今和次郎展 ふたりが描いた大正・昭和のくらしと風景』、2002年、4-7頁）

(11) 棟方の純三への思いは、前述（5）でも述べたが、『創作版画小品集』シリーズを昭和46（1971）年に復刻刊行した『今純三・小品集』（今純三遺作復刻刊行委員会）に寄せた一文「今純三画伯」によると、「バラライカ」から受けた印象は鮮烈だった（菅野晶「3点の棟方像をめぐって—今純三、下澤木鉢郎、関野準一郎と棟方志功 青森県立美術館特別展図録『森羅万象 棟方志功とその時代展』、2016年、230-236頁）。

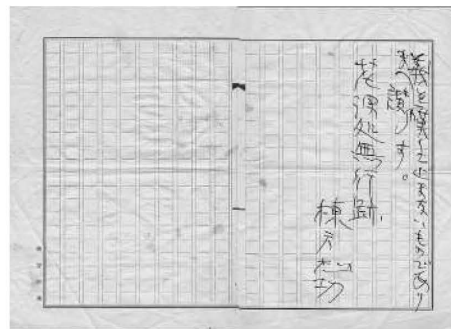
棟方が制作した「バラライカの女の柵」は、昭和37（1962）年青森版画会第4回に出品された（同版画会展示目録によると「バラライカの裸女 今純三氏に捧ぐ」として出品されたと考えられる）。この作品を棟方自身も気に入っていたとみえ、「このごろのわたしの好きな作品」としていた（同誌を編集していた青森市出身の版画家加藤武夫に宛てた葉書によると、版画誌「青森版画」30号記念の浴衣図案として同会に提案している・郷土館蔵）。しかし、この時の出品作品の所在は不明。本展に出品した作品は、後摺りもの（1972年）。

(12) 純三が青森に移り住んでまもない頃に手がけた肖像画（油彩）に「淡谷金蔵氏肖像」（1925年、右、郷土館蔵）がある。淡谷金蔵は、青森市出身の歌手淡谷のり子の祖父で、文学者・政治家の淡谷悠蔵の父。淡谷家は明治期、市内で有数の豪商だった。移住後の純三の生活を支えた歌人船水公明は、悠蔵とは文学仲間で、二人は、文芸誌『黎明』を創刊。本誌の表紙もしばらく純三が担当した。

(13) 純三の描写姿勢、実景描写の誠実さを裏付ける貴重な情報をお寄せいただいた。第2集「浅虫の風景とスケッチ」中の浅虫臨海実験所（当時）併設の水族館を描いた景（「水族館附近」）の画面奥に、現在は土台しか確認できない建物—研究者が周辺で生物を観察・実験する際に待機、宿泊、雨宿り等をするための建物が描かれているという。東北大学大学院生命科学科浅虫海洋生物学教育センター・美濃川拓哉氏のご教示による。

(14) 原版の修復時、本図については、水路の水の流れ、沼や池の波紋、付近の木々について、エングレービングやドライポイントで加筆した痕跡があると報告されている。修復後の試刷にはその部分の表現が認められるが、完成版にはそれらの部分の表現が見えない。『画譜』としていったん発表した後も、純三が原版に手を入れ続け、さらに表現の完成度を高めようとしていたと考えられる。その他の原版の修復については、前掲（6）戸村・對馬「今純三銅版画原版の修復についての報告」参照。

(15) 三上伸氏の父である青森オフセット印刷株式会社の創業者、三上成吉（1910～1999年）は、大正12（1923）年～昭和4（1929）年まで啓明社に、昭和6（1931）年～昭和16（1941）年まで松尾石版所に勤務した。啓明社は、青森に転居した純三が大正15（1926）年に印刷工として勤務した印刷所であり、松尾石版所は『青森県画譜』の印刷を担当した印刷所であった。『青森県画譜』制作時、成吉氏は印刷所からの使いとして毎日のように純三のアトリエを訪れており、当時の純三との思い出や松尾印刷所について記した文章を残している（松尾石版所 三上成吉『青森県印刷史』青森県印刷工業組合、1982年、35～38頁）



棟方志功草稿「今純三画伯に捧ぐ」



淡谷金蔵氏肖像(油彩・キャンパス)

図1：原版修復時の試刷（銅版原版から刷ったもの）。図2の見本版に書き加えられている建物部分の表現がない。



図2：善知鳥神社境内鳥瞰図（見本）：画面右下の隅の点線で囲まれている部分の建物は、ペンで直接描き加えられている



図3：追加部分の建物（エッチング）。

原版修復時の試刷 9.6×5.8 cm



図4：薄い紙に刷られた「青森市新町通り夜景」。画面余白下に色版を重ねるための印（十字）がある。

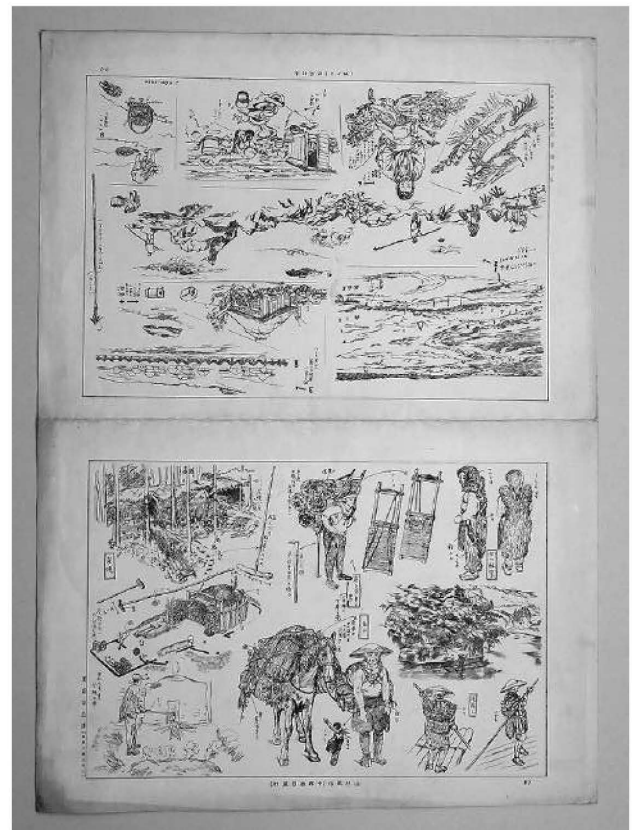


図5：版面を複数配置した試刷。「漁村風俗」（上）と「山村風俗」（下）。いずれも第十一輯。

種別	丁数	東奥日報広告 「青森県画譜予約募集」	画譜の袋 内容目次(作品名)	青森県画譜 内容目次による作品名	画譜都市別内 容	図譜内(作品)のサイン等	発行年月	技法	その他
第一	1	善知鳥神社境内全景	善知鳥神社境内鳥瞰図		青森市	昭和八年 今純三 畫	1933年10月	銅版	○2点あり 鳥瞰図
第一	2	野辺地愛宕公園 御料馬花鳥号銅像	御料馬花鳥号銅像		野辺地町愛宕公園		1933年10月	コロム石版	
第一	3	御幸公園	御幸公園全景	黒石町御幸公園全景	黒石町	昭和八年 今純三 画	1933年10月	銅版	鳥瞰図
第一	4	根城址より 馬淵川の眺望	根城々址より馬淵川眺望		八戸市外	昭和八年 今純三 画	1933年10月	砂目石版	
第一	5	最勝院五重塔	最勝院五重塔		弘前市	昭和八年 今純三 画	1933年10月	コロム石版	○
第一	6	三浦山より見たる奥羽種馬場	三浦山より見たる奥羽種馬所		七戸町	昭和八年 今純三 画	1933年10月	コロム石版	
第一	7	五所川原乾橋風景	乾橋風景	五所川原乾橋風景	五所川原町	昭和八年 今純三 画	1933年10月	石版	
第一	8	田園風景 案山子一百図	案山子一百図		青森市近郊所見	今純三 画 昭和八年九月廿四日青森市近郊所見	1933年10月	銅版	○ 考現学
第二	9	大戸瀬風景	大戸瀬海岸風景		西津軽郡	昭和八年 今純三 画	1933年11月	銅版石版併用	
第二	10	蕪島のうみねこ	蕪島の海猫		八戸市		1933年11月	多色石版	
第二	11	猿賀神社	猿賀神社境内鳥瞰図		南津軽郡	昭和八年 今純三 畫	1933年11月	銅版	○ 鳥瞰図
第二	12	風俗図 取り残された花見客	風俗図 取り残された花見客	取り残された花見客	青森市 弘前市	J.KON. 1933.	1933年11月	銅版	考現学
第二	13	為信公銅像	津軽為信公銅像		弘前市	昭和八年 今純三 画	1933年11月	石版	
第二	14	長勝寺	十二湖風景		西津軽郡岩崎村	昭和八年 今純三 画	1933年11月	多色石版	
第二	15	青森港	青森港風景		(記載なし)	J.KON. 1933.	1933年11月	石版	
第二	16	風俗図 馬の競市	風俗図 馬の競市		三本木町	J.KON. 1933.	1933年11月	石版	
第三	17	青森県庁	青森県庁		(記載なし)	昭和八年 今純三 画	1933年12月	石版	
第三	18	弘前城天守閣	弘前城天守閣		(記載なし)	昭和八年 今純三 畫	1933年12月	多色石版	
第三	19	深浦港風景	深浦港		(記載なし)	昭和八年 今純三 画	1933年12月	石版	
第三	20	淋代飛行場	淋代飛行場		上北郡三沢村	J.KON. 1933.	1933年12月	銅版石版併用	
第三	21	中野の紅葉	中野山の紅葉		南津軽郡山形村	昭和八年 今純三 画	1933年12月	多色石版	
第三	22	八戸市内図絵	八戸市三日町、十三日町通り		(記載なし)	J.KON. 1933.	1933年12月	砂目石版	
第三	23	大鱒蔵館温泉	阿闍羅山と大鱒、蔵館温泉		南津軽郡	昭和八年 今純三 画	1933年12月	石版	鳥瞰図
第三	24	風俗図 露店さまざま	風俗図 露店、屋台店さまざま		青森市	昭和八年十月青森市内所見 J.KON	1933年12月	銅版	考現学
第四	25	小川原沼風景	小川原沼風景		上北郡	昭和八年 今純三 画	1934年1月	石版	
第四	26	革秀寺	津軽山革秀寺		中津軽郡	昭和九年 今純三 画	1934年1月	銅版	鳥瞰図
第四	27	収穫期の林檎園	収穫期の林檎園		南津軽郡	昭和八年秋 今純三 画	1934年1月	多色石版	
第四	28	野内石油タンク	野内石油タンク	野内の石油タンク	東津軽郡	J.KON. 1933.	1934年1月	石版	鳥瞰図
第四	29	弘前市内写生図	弘前市内スケッチ	弘前市内のスケッチ	(記載なし)	J.KON. 1934.	1934年1月	石版	
第四	30	牧場風景	浅虫風景 裸島と臨海実験所		(記載なし)	昭和八年 今純三 画	1934年1月	石版	
第四	31	白糠風景	白糠港風景		下北郡	昭和九年 今純三 画	1934年1月	銅版	
第四	32	風俗図 正月風景	正月風景	青森市 正月風景	青森市内	昭和九年一月青森市内所見 今純三画	1934年1月	銅版	考現学
第五	33	雪の八甲田山	雪の八甲田山		(記載なし)	昭和九年一月 今純三 画	1934年2月	石版	
第五	34	雪中行軍遭難者 墓地全景	雪中行軍遭難者 墓地全景	雪中行軍遭難者墓地鳥瞰図	(記載なし)	昭和九年 今純三 畫	1934年2月	多色石版	鳥瞰図
第五	35	浅所白鳥渡来情景	浅所白鳥渡来情景	浅所の白鳥渡来情景	(記載なし)	昭和九年一月 今純三 画	1934年2月	石版	
第五	36	内真部森林	内真部森林		東津軽郡	昭和九年 今純三 画	1934年2月		
第五	37	坐頭石風景	坐頭石風景		中津軽郡	なし	1934年2月	砂目石版	
第五	38	弘前市内図絵	風俗図 開大会場図	開大会場図	(記載なし)	J.KON 12/2/1928.	1934年2月	石版	考現学
第五	39	藤崎町図絵	藤崎町図絵		(記載なし)	昭和九年 今純三 画 小学校階上より見たる藤崎町の一部	1934年2月	石版	
第五	40	郷土工芸図 その一	郷土工芸図(津軽のこぎん)	郷土工芸図 津軽の『こぎん』	(記載なし)	J.KON -1933-	1934年2月	石版	考現学
第六	41	鯉ヶ沢町白八幡宮	鯉ヶ沢町白八幡宮		(記載なし)	昭和九年 今純三 画	1934年3月	石版	鳥瞰図
第六	42	油川野木和湖風景	油川野木和湖風景		(記載なし)	昭和八年春 今純三 画	1934年3月	石版	
第六	43	大鱒スロープ	大鱒スロープ		(記載なし)	昭和九年二月 今純三 画	1934年3月	石版	
第六	44	黒石町内図絵	黒石町内図絵		(記載なし)	昭和九年二月 今純三 画	1934年3月	石版	
第六	45	板柳町図絵	板柳町図絵		(記載なし)	J.KON. 1934.	1934年3月	石版	考現学

今純三・生誕130年展と『青森県画譜』

第六	46	青森市新町通りの夜景	青森市新町通り夜景	青森市新町通りの夜景	(記載なし)		1934年3月	多色石版		
第六	47	年中行事 えんぶり	年中行事『えんぶり』	年中行事 えんぶり	八戸市	昭和九年二月 今純三 画	1934年3月	銅版		考現学
第六	48	冬の街頭風俗	冬の街頭風俗		(記載なし)	昭和九年 今純三 画	1934年3月	石版		考現学
第七	49	弘前公園図絵	弘前公園		(記載なし)	昭和九年 今純三 画	1934年4月	石版		鳥瞰図
第七	50	海童神社	板柳町海童神社		(記載なし)	昭和九年 今純三 画	1934年4月	石版		鳥瞰図
第七	51	満州事変戦死者慰霊碑図	満州事変戦没勇士慰霊碑		(記載なし)	昭和九年 今純三 画	1934年4月	石版		
第七	52	聖徳公園	聖徳公園鳥瞰図(第八師団凱旋ノ日)	聖徳公園(第八師団凱旋の日)	(記載なし)	昭和九年四月四日 今純三 画	1934年4月	多色石版		鳥瞰図
第七	53	常光寺	弘前市長勝寺	太平山長勝寺	(記載なし)	太平山長勝寺 昭和九年 今純三 画	1934年4月	石版		鳥瞰図
第七	54	農村民家図	農村民家図		南部地方	農村民家図(旧南部地方の例)	1934年4月	石版		考現学
第七	55	子供風俗	子供風俗		青森市	J.KON. 1934. コドモ風俗に関するいろいろ-青森-	1934年4月	石版		考現学
第七	56	風俗図 闘犬会場図	郷土玩具(各地)	郷土玩具図	各地	J.KON. 1934.	1934年4月	多色石版		考現学
第八	57	権現崎風景	権現崎風景		北津軽郡小泊	昭和九年 今純三 畫	1934年5月	多色石版		
第八	58	堰神社田宮	堰神社	藤崎町堰神社	藤崎町		1934年5月	石版		鳥瞰図
第八	59	鯉ヶ沢高沢寺	瀧山高沢寺		鯉ヶ沢町	昭和九年 今純三 画	1934年5月	石版		鳥瞰図
第八	60	下北郡内図(未定)	十三湖風景		(記載なし)	昭和九年 今純三 画	1934年5月	多色石版		
第八	61	青森市内写生図	青森市内写生図		(記載なし)	J.KON. 1933.	1934年5月	石版		考現学
第八	62	舟のいろいろ	船のいろいろ		青森港	J.KON. 1933.	1934年5月	石版		考現学
第八	63	年中行事 観桜会	観桜会風俗		弘前市	観桜会(弘前公園)	1934年5月	石版		考現学
第八	64	風俗図 乞食の風態いろいろ	風俗図乞食の風態	風俗図 乞食の風態	(記載なし)	乞食の風態 J.KON.	1934年5月	銅版	○	考現学
第九	65	十三湯風景	栗研温泉風景うぐひ瀧	栗研温泉風景	下北郡	栗研温泉風景うぐひ瀧 昭和九年五月 今純三 画	1934年6月	多色石版		
第九	66	県社八幡宮(弘前)	県社八幡宮		弘前市	県社八幡宮(弘前市) 昭和九年 今純三 画	1934年6月	石版		
第九	67	恐山	霊場恐山鳥瞰図		(記載なし)	昭和九年 今純三 畫	1934年6月	石版		鳥瞰図
第九	68	青森四国八十八ヶ所 霊場全景	堤橋風景	堤橋風景(青森市)	青森市	昭和九年初夏 今純三 画	1934年6月	石版		
第九	69	五所川原町図絵	温湯温泉風景	温湯温泉	南津軽郡	昭和九年 今純三 画	1934年6月	石版		
第九	70	大湊町図絵	田名部町風景		(記載なし)	J.KON. 1934.	1934年6月	多色石版		
第九	71	五戸町図絵	五戸町図絵	五戸町のスケッチ	(記載なし)	J.KON. 1934.	1934年6月	石版		考現学
第九	72	板留温泉	板留温泉		南津軽郡	昭和九年 今純三 画	1934年6月	石版		
第十	73	十和田風景	十和田湖風景		(記載なし)	十和田湖(「金屏風」より俯瞰) 昭和九年 今純三 画	1934年7月	多色石版		
第十	74	奥入瀬溪流	奥入瀬溪流図	奥入瀬溪流	(記載なし)	昭和九年 今純三 画	1934年7月	多色石版		
第十	75	県社三八城神社	県社三八城神社	県社三八城神社(八戸城址)	八戸市	昭和九年 今純三 画	1934年7月	石版		鳥瞰図
第十	76	気比神社	気比神社		上北郡	昭和九年 今純三 画	1934年7月	石版		鳥瞰図
第十	77	尻屋崎燈台	鳶温泉風景		(記載なし)	J.KON. 1934.	1934年7月	多色石版		パノラマ
第十	78	温湯温泉	木造町のスケッチ		(記載なし)		1934年7月	石版		考現学
第十	79	堤橋風景	青森四国八十八ヶ所霊場全景	青森四国八十八ヶ所霊場	(記載なし)	青森四国八十八ヶ所霊場鳥瞰図 昭和九年 今純三 画	1934年7月	石版		鳥瞰図
第十	80	風俗図 乗物いろいろ	風俗図乗り物いろいろ	風俗図 乗物に関するいろいろ	(記載なし)	K	1934年7月	石版		考現学
第十一	81	岩木山風景	岩木山風景		(記載なし)	昭和九年夏 弘前常磐坂にて 今純三 畫	1934年8月	石版		
第十一	82	種差風景	種差海岸風景		(記載なし)	昭和九年 今純三 画	1934年8月	多色石版		パノラマ
第十一	83	鳶温泉	五所川原町のスケッチ		(記載なし)	昭和九年 今純三 画	1934年8月	石版		考現学
第十一	84	櫛引八幡宮	櫛引八幡宮		三戸郡	櫛引八幡宮(三戸郡館村) 昭和九年 今純三 画	1934年8月	石版		鳥瞰図
第十一	85	金木芦野公園	芦野公園	金木町芦野公園	金木町	昭和九年 今純三 画	1934年8月	多色石版		
第十一	86	三本木町図絵	三本木町のスケッチ		(記載なし)	昭和九年 今純三 畫	1934年8月	石版		考現学
第十一	87	山村風俗	山村風俗		中郡西目屋村	昭和九年夏 今純三 画	1934年8月	石版		考現学
第十一	88	浅虫風景	牧場風景		上北郡三沢村	J.KON. 1934.	1934年8月	多色石版		
第十一	89	郷土玩具図絵	目屋溪流風景		(記載なし)	目屋溪流 昭和九年 今純三 画	1934年8月	多色石版		
第十一	90	漁村風俗	漁村風俗		三戸郡階上村	J.KON. 1934.	1934年8月	石版		考現学
第十二	91	仏ヶ浦風景	仏ヶ浦風景		下北郡	昭和九年 今純三 画	1934年9月	多色石版		

第十二	92	南郡石/塔奇勝	石/塔奇勝	石/塔	南郡	昭和九年 今純三 畫	1934年9月	多色石版		
第十二	93	岩木山神社	岩木山神社		(記載なし)	昭和九年九月 今純三 畫	1934年9月	石版		
第十二	94	先住民俗遺物図絵	先住民俗遺物図		(記載なし)	J.KON. 1934.	1934年9月	石版		考現学
第十二	95	粟研温泉	尻屋崎燈台		(記載なし)	J.KON. 1934.	1934年9月	多色石版		
第十二	96	合浦公園全景	合浦公園鳥瞰図	合浦公園全景	(記載なし)	J.KON. 1934.	1934年9月	石版		鳥瞰図
第十二	97	青森県師範学校	青森県師範学校鳥瞰図		(記載なし)	J.KON.	1934年9月	石版		鳥瞰図
第十二	98	木造町図絵	脇野沢風景	脇野沢大崎風景	下北郡	J.KON. 1934.	1934年9月	石版		
第十二	99	年中行事 お山参詣	年中行事 お山参詣	年中行事お山参詣	(記載なし)	年中行事「お山さんけ」昭和九年 今純三 畫	1934年9月	石版		考現学
第十二	100	年中行事 ネプタ	年中行事 ネプタ	年中行事ネプタ	(記載なし)	J.KON. 年中行事「ネプタ」	1934年9月	石版		考現学

凡例

この表は『青森県画譜』（以下、『画譜』）の第一輯から第十二輯までの計1～100葉（丁数）を下記の項目により作成したものである。

・輯別

・葉（丁数）

各画に付された1～100までの通し番号

・東奥日報広告「青森県画譜予約募集」

昭和8年9月10日の東奥日報の社告「青森県画譜予約募集」に掲載された作品名

*「青森県画譜予約募集」と「青森県画譜内容目次」による作品名と比較検討したところ、予約募集の作品名と内容目次とが異なるものは、全部で18葉あった。その18葉については太字で表記した。18葉のうち予約募集（以下、旧と記す）の第9輯70葉が「大湊町」から内容目次（以下、新と記す）では「田名部町風景」に、旧第二輯14葉「長勝寺」は新では「十二湖風景」に、旧第七輯53葉「常光寺」が新では「長勝寺」に変更され、常光寺は新では不採用。旧第四輯29葉「弘前市内写生図」と旧第五輯38輯「弘前市内図絵」が重複していた。旧第十一輯89葉の「郷土玩具」が新では「目屋風景」（旧では不採用）に、その他については発行順序を入れ替えているのみで、作品名の変更（対象とする風景などが同じであれば、作品名の表記の違いは同一とした。）はなかった。

・画譜の袋 内容目次（作品名）

月毎に配布された8～10葉の『画譜』の袋に印刷されている内容目次（作品名）

*『画譜』は8～10葉の作品を茶色の封筒に入れて予約者に届けられた。この封筒には8～10葉の作品名と『画譜』の写生場所を青森県の地図上に落とし込んだものが印刷されて、純三の予約者への心遣いが感じられる。（『画譜』の発行前に東奥日報社が購読者にたいして配布した純三制作の「最新青森県地図」との関連があるのかもしれない。）

・青森県画譜内容目次による作品名

第十二輯に付加された「青森県画譜内容目次」の表記に従った。

「画譜の袋 内容目次（作品名）」の作品名と表記が異なるもののみ記載した。

*『画譜』は昭和9年9月20日に第十二輯を発行して完結した。この十二輯には、それまでのように、画10葉（第一輯～第十輯までは8葉）と純三による解説2葉に加えて、東奥日報社社長山田金次郎による「青森県画譜終刊に当りて」1葉、100葉の各作品名を発行順に記した「青森県画譜内容目次」1葉、描かれた風景、建築物等をその各所在地毎に分類した「青森県画譜郡市別内容目次」1葉、純三による「作者の言葉」一様の計4葉が付加された。

・画譜郡市別内容

第十二輯に付加された「青森県画譜郡市別内容目次」の分類に従った。

・図譜内に記された作品名、サインなど

図譜内に原版の段階で書き込んだ作品名などの情報。

・発行年月

画譜の第一～第十二輯ごとの発行年月

・技法

各輯に添えられた「青森県画譜第〇輯解説」の解説部分の最後に（ ）で表記された版画の技法

・その他

郷土館所蔵の『画譜』の原版の有無など